

【編集後記】

徳島県の大塚国際美術館と紅白・米津玄師効果

紀淡海峡を挟んでお隣の徳島県へは、和歌山港から徳島港まで南海フェリーで2時間。そこから車で約30分、瀬戸内海国立公園の一部で四国と淡路島の間、大毛島の鳴門公園内に、世界に類を見ない陶板名画美術館、「大塚国際美術館」がある。鳴門海峡や大鳴門橋を望む眺望絶佳の場所に、大塚製菓等9社から成る大塚グループ（よく知られる製品に、オロナインH軟膏や、ポカリスエット、ボンカレー等）が、創立75周年記念事業として建設、1998年に開館した。敷地面積6.6万㎡・建築面積9,282㎡・延床面積2.9万㎡、地下5階・地上3階の巨大な建物の過半を山中に埋設した。景観維持と高さ13m以内という自然公園法に則り、一旦、山を削り取り、地下5階の巨大な建物を造り、埋め戻すという大事業であった。

鳴門は、大塚グループの発祥の地である。明石海峡大橋の完成（1998年）に合わせ、この地に多くの人を迎えられるような施設を作りたいという愛郷の念もあった。

この美術館建設に至る経緯は、大塚グループの元総帥で初代館長、大塚正士氏（故人）による開館時の挨拶で、「一握りの砂」と題して詳しく述べられ、現在も、来館者用パンフレットに掲載されている。

発端は1971年。当時、大塚化学の技術部長を務めていた末弟の大塚正富氏らが正士氏を訪ね、机の上に、「鳴門海峡に面した砂浜で採取した一握りの白砂」を盛った。そして、従来のトン単位で売るコンクリートの原料用でなく、付加価値の高いタイルを作ることを強く提案した。正士氏はその気迫に驚きつつ同意し、県知事に採取等の許可を得た。そして、鳴門の工場内に炉を作り、タイルの製造に着手し、その後、滋賀県信楽町の陶器会社と合併で、大塚オーミ陶業という会社を設立した。研究を進め、1m角の大型陶板の制作（現在では1m×3m以上）に成功したが、73年のオイルショックで建設需要が激減、受注が見込めず、操業も危ぶまれた。

その高度な技術を生かすべく考え出されたのが、「大型美術陶板・写真陶板」の制作で、2万色の色も開発した。青柳正規 東大副学長（当時）ら6名の美術史家によって作品が選定され、原画の著作権者らの許諾取得、現地調査・撮影、転写紙への印刷、陶板転写、1300度の高温で焼成、さらに職人の手で筆遣い等を再現して焼成後、原画の関係者が来日して検品、という入念細心の過程を経て、完成となる。陶板画は堅牢で、実に2000年以上も退色劣化せず、風水害や火災にも耐えるという。

今年で開館21年になるが、昨年末のNHK「紅白歌合戦」では、それまでTV生出演のなかったシンガーソングライター、米津玄師（徳島出身）が、館内の「システィーナ・ホール」から、大ヒット曲「Lemon」を生中継で歌い、大きな反響を呼んだ。このホールは、バチカン市国にあるシスティーナ礼拝堂をそっくり再現したもので、高さ16m、800㎡のカーヴした天井全面には旧約聖書の「創世記」が描かれ、正面壁面のミケランジェロの「最後の審判」をバックに、5,000本の蠟燭の灯が瞬く荘厳で感動的なステージであった。

かつて、ここで、将棋の羽生善治と深浦康市との王将戦が公開対局で行われたり、片岡愛之助らによる松竹歌舞伎が毎年、開催されている。2010年には、夫人が徳島出身とのことで、横綱白鵬の結婚披露宴が行われたとのこと。わたしが訪ねた時は、チェロのコンサートが行われていた。演者にはこの上なく魅力的な場であろう。

館内には、ルーブルの至宝「モナ・リザ」も、マドリードの門外不出の「ゲルニカ」も、プラド美術館のエル・グレコの祭壇画も、レンブラントの最高傑作、「夜警」の大画面も、ダリもウォーホルも、リキテンスタインの「ステッピング・アウト」もある。商業目的でない写真撮影は自由である。もちろん、本物ではない。しかし、古代から現代に至る「1,000点を超える原寸大の、絵の具の凹凸、筆の筆致も再現した精巧な陶板画」は、複製画という言葉のイメージを凌駕する迫力をもつ。後世への遺産として制作、保存すると共に、多くの人、特に若い人が名画に触れる機会となり、将来、現地で本物を鑑賞してほしいという。巨大な美術テーマパークのような楽しさと驚きも与えてくれる。

年間来訪者は約38万人（日本の美術館の平均は約8万人）。かつて、世界最大の旅行クチコミサイト、トリップアドバイザーの「国内の行ってよかった美術館＆博物館ランキング」で1位になったことがあるが、紅白放映後の年明け早々は5割増と、賑わいを増しているらしい。

今、徳島県では、関空や大阪USJに近いという地理的環境をふまえ、鳴門の渦潮や大塚国際美術館を観光のキラーコンテンツとして、大阪エリアからこの鳴門公園エリアをインバウンド専用シャトルバスで結ぶ構想がある。瀬戸内海国立公園の一部である鳴門公園エリアに、「世界遺産登録を目指す鳴門の渦潮」と、世界中からコレクションした陶板名画の集合体である美術館が存在し、類稀な景観、施設であるとし、徳島を四国観光の玄関口にすることがねらいである。

国は、2020年迄に、訪日観光客4,000万人を目標にしている。近年、インバウンド観光の構成アイテムとして、美術館がクローズアップされている。観光庁の「観光ビジョン実現プログラム2018」によると、美術館について、「観光コンテンツとしての質を向上させ、訪日外国人旅行者のニーズに合わせた情報発信、体験型プログラムの充実、ニーズを踏まえた開館時間の延長等、観光客の満足度を上げて観光拠点化を図る」ことが明記されている。

最近、国内外で館内の写真撮影を許可する美術館が増えてきたが、SNS等によるPR効果も集客や評価を左右する。おそらく20年程前にはなかった「インバウンド観光」という視点と、本来、主に作品の収集・保管・研究・教育を担ってきた芸術の殿堂、美術館の存在意義、今後のあり方等、注目していきたい。

（谷 奈々）

21世紀 WAKAYAMA

Wakayama Institute for Social and Economic Development

vol.92

発行 2019年8月9日
編集発行者 一般財団法人 和歌山社会経済研究所
〒640-8033 和歌山市本町2丁目1番地
フォルテワジマ6階
TEL 073-432-1444 (代)
FAX 073-424-5350
URL : <http://www.wsk.or.jp/>
印刷 白光印刷株式会社

無断転載・複写を禁ずる

裏表紙の写真は、当研究所 OB 萬羽昭夫氏撮影